

## 24 Trastuzumab の長期投与の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・田中 乙雄  
梨本 篤・土屋 嘉昭・藪崎 裕  
瀧井 康公・中川 悟・野村 達也  
村山 茂美・坂田 英子

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】Trastuzumab 長期投与による心毒性の実態を明らかにする。

【方法】2001年7月～2007年3月までのTrastuzumab 投与86例中、2年以上の長期投与例21例を対象に心毒性発現と危険因子の関係を検討。EF値58%未満を心機能低下と定義。投与期間中央値32(24～54)月、投与回数中央値127(52～198)回、観察期間中央値40(25～61)月。

【結果】投与前値よりEFが10%以上低下した例は11例で、低下までの期間中央値9(1～40)月、最頻値5ヶ月、年齢やAnthracycline系薬剤の治療歴と関連なかった。心毒性による投与中止(心機能低下あるいはEFが投与前値より10%以上低下しかつ心症状あり)は2例(9.5%)。1例は休薬後心機能が回復し再投与中、1例は現在休薬中である。

【結語】長期投与による心機能低下症例の増加はなかった。しかしEFの10%低下までの期間を考慮すると、半年に1回程度の心エコー検査は必要と考える。

## 25 FOLFOX6 化学療法が奏効し、切除しえた巨大転移性肝腫瘍の1例

皆川 昌広・黒崎 功・飯合 恒夫  
嶋村 和彦・高野 可赴・竹久保 賢\*  
岡本 竹司\*・岡田 貴幸\*\*・畠山 勝義  
新潟大学医歯学総合病院第一外科  
同 第二外科\*  
県立中央病院外科\*\*

【はじめに】巨大転移性肝腫瘍に対して、FOLFOX6 化学療法により縮小化後、切除しえた症例を経験したので、これを報告する。

症例は58歳、女性。2006年8月よりの体重減

少を主訴に来院、精査にてS状結腸癌、肝転移(単発だが、肝右葉からS4に到る巨大な転移巣)と診断された。2007年2月8日、原発巣に対し、S状結腸切除を施行(T2N1H2P0M0 Stage IV)した。術後FOLFOX6を5コース施行したところ、肝転移巣が著明に縮小したため、肝切除目的に当科紹介、受診となった。6月7日、右3区域切除術施行、さらに癌浸潤が疑われたため、中肝静脈・下大静脈の部分切除も施行、肝静脈および下大静脈パッチを行った。術後門脈血栓を合併したが、血栓除去術後の経過は良好である。

【まとめ】転移巣として大きいものであっても、効果的な化学療法により縮小化できれば、切除が可能になるとともに、予後の改善も期待しうる。

## 26 FOLFOX 療法中の血清5-FU 濃度測定の意義

宗岡 克樹・白井 良夫\*・佐々木正貴  
朝倉 俊成\*\*・神田 循吉\*\*  
若林 広行\*\*・畠山 勝義\*  
新潟医療センター病院外科  
新潟大学大学院消化器・一般外科  
学分野\*  
新潟薬科大学薬学部臨床薬剤治療  
学研究室\*\*

【目的】FOLFOX 療法施行中の血清5-FU濃度を指標とした個別化治療の可能性を検討する。

【方法】再発性大腸癌13症例を対象とした(男/女:7/6例)。転移部位は肝+肺1例、腹膜1例、肝6例、肝+肺+リンパ節1例、肝+肺+脳1例、リンパ節3例であった。4例でFOLFOX 療法施行日に血清5-FU濃度を測定し(HPLC法)、その日内変動をグラフ化しAUC(血清5-FU濃度曲線下面積)を求めた。治療期間は3～10か月であった。

【結果】FOLFOX4でCRは1例、PRは2例、SD9例、PD1例であった。Grade4の副作用(血小板減少、好中球減少)を1例認めた。FOLFOX4でPDであり、FOLFOX6へ変更しSDとなった1例では、FOLFOX6時のAUCは、FOLFOX4に比